講演会 & ライブ な日々 ④④

古川 秀明

『般若心経とオープンダイログ 3』

祖父の遺体が火葬場で燃えたその日の夜から、私の眠りは途絶えました。

おじいちゃんは死んでどこへ行ってしまったのだろう・・・。

人間はいつか死ぬのになんで生きてるんだろう・・・。

死んだらどうなるのだろう・・・。

なんで僕はここにいるんだろう・・・。

僕もいつかは死んでしまうのだろうか・・・。

宇宙の果てに何があるんだろう。

もし果てがあるのなら、その果ての向こうにはなにがあるんだろう....。

そんな果てにたどり着く前に、僕は死ぬのだろうか....。

僕はいつ死ぬんだろう・・・。

こんなことを考え出すと、恐怖で息が荒くなり、動悸が激しくなり、冷や汗が出てきました。

そんな恐怖におびえる私のところに、柱時計の音が眠れなくなる追い打ちをかけます。

当時、商売が順調で高収入に恵まれていた父が柱時計を買ってきました。

何かの映画で、お金持ちの家に柱時計があり、優雅に時を刻んでいるシーンを見たいのです。

その柱時計はずっと休まず「コッチコッチコッチコッチ」と音を立てて時を刻みます。

昼間は他の生活音に紛れてさほど気になりません。

しかし、当たりが静まり返った夜、しかも眠れない私にとってはとてつもなく大きな音に聞こえました。

何で人は死ぬんだろう・・・コッチコッチコッチコッチ

僕もいつか死ぬのかな・・・コッチコッチコッチコッチ

宇宙の果てにはなにがあるのかな・・・コッチコッチコッチコッチ

なんでいつか死ぬのに生まれてくるんだろう・・・グオッチグオッチ
グオッチグオッチ

私は両手で両耳を押さえ、大声で「ぎゃ～、たすけて～」と叫びました。

私の隣で寝ていた両親は、私の声に驚いて跳び起きました。

父「なんや！どうしたんや！なんか怖い夢でもみたんか！」

母「ほんまや、びっくりしますがな。どないしゃりましたんや？」

私「死ぬのんが怖い・・・死ぬのんが怖い・・・死ぬのんが怖い・・・」

私の言葉に父も母もケラケラ笑いました。

父「心配すんな、もう戦争は終わった。爆弾は降ってきいひんわい」

母「大丈夫でおますで、米もたまごも肉もおますよつてに」

両親の愛情という温かく平和な布団の間で寝ながら考えている私の「死」と、戦争に志願兵として従軍した父や、戦中、戦後の食べ物のない時代を食うや食わずで生き抜いてきた母が考える「死」は、全く別物の「死」でした。

私は父に尋ねました。

私「僕、死なへんやんな？」

父は笑いながら答えてくれました。

父「心配するな、絶対死ぬ」

私「ひえ～、いつ死ぬん？」

父「それは誰にもわからん。10年後かもしれへん。ひよっとしたら明日の朝死んでるかもしれへんぞ」

私「ぎよえ～！死んだらどうなるんや～？」

父「じいさんの葬式で見たやろ。最後は焼き場で焼かれて、はいそれまでよ」

私「ひえ～、もし焼かれてる時に生き返ったらどうなの？」

父「まあ、メチャクチャ熱いやろな。もう一回焼け死ぬしかない」

私「ぎゃ～～～！お母ちゃん、死にたくない！死にたくない！」

母「何を言うてますのや。あんさん、まだこないだ生まれたとこでっせ」

私「こないだて、8年も9年も前やん」

父「まあ、こればかりは順番に死ぬとは限らへんからな・・・」

私「え？ほんなら僕がお父ちゃんやお母ちゃんよりもはよ死ぬかもしれへんの？」

父「まあ、そういうことやな」

私「ひ～、ほんならどこいくの？」

父「こないだ死んだじいさんが迎えに来てくれるやろし、心配すんな」

私はお通夜の時の祖父を思い出しました。

青白い顔をして、鼻や耳に綿を詰められていました。

その姿かたちの不気味なこと・・・。

あのおじいちゃんがむくっと起き上がり、僕を迎えに来たら、きっと僕は怖くて悲鳴をあげながら逃げだしてしまうだろう・・・。

父も母も面倒くさそうに、明日も仕事があるからもう寝るように私を強く促しました。

しかし、両親の促す言葉は私の恐怖を増幅させ、終わることのない夜を生み出しました。

(次号に続きます)

シンガーソングライター
ふるかわひであき